

『親学プログラム2』をご利用いただくにあたって

I 『親学プログラム2』について

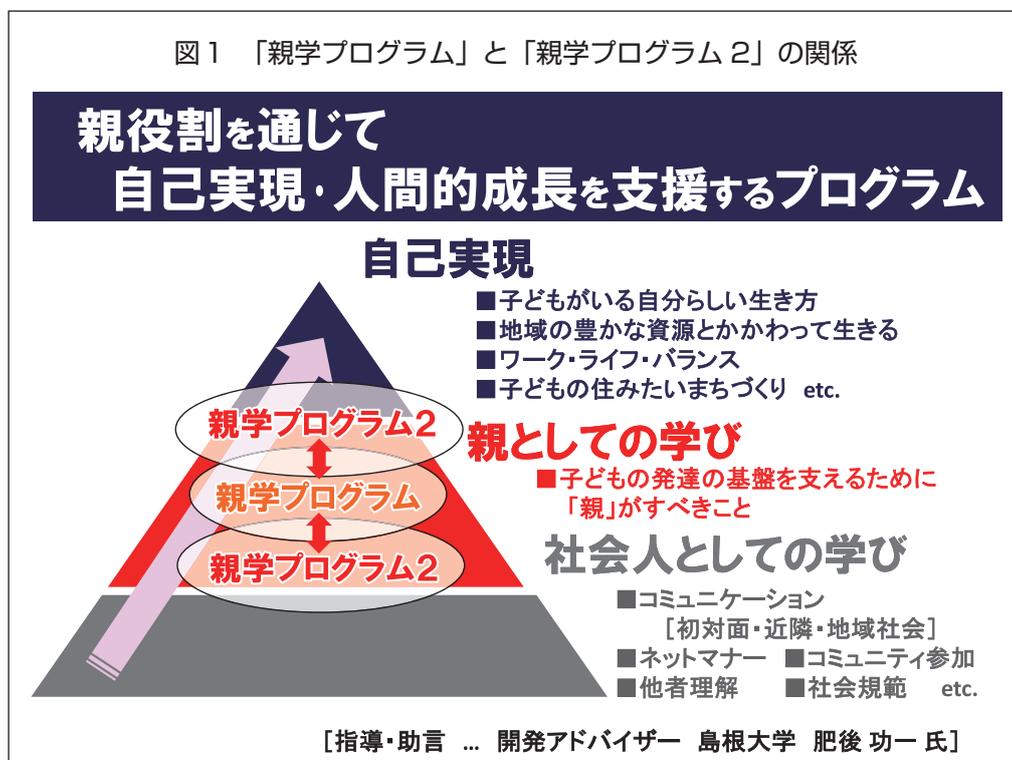
1 『親学プログラム』と『親学プログラム2』の関係

『親学プログラム』は、参加型学習の手法を用いた親同士の学び合いにより、「親としての役割」や「子どもとのかかわり方」についての気づきを促す学習プログラムです。

一方、『親学プログラム2』は、「いじめや児童虐待の予防」に対応した学習プログラムとなっています。そのため、従来の“楽しく”“互いに”“体験的に”学び合う参加型の学習スタイルを踏襲しながら、新しい手法も取り入れています。

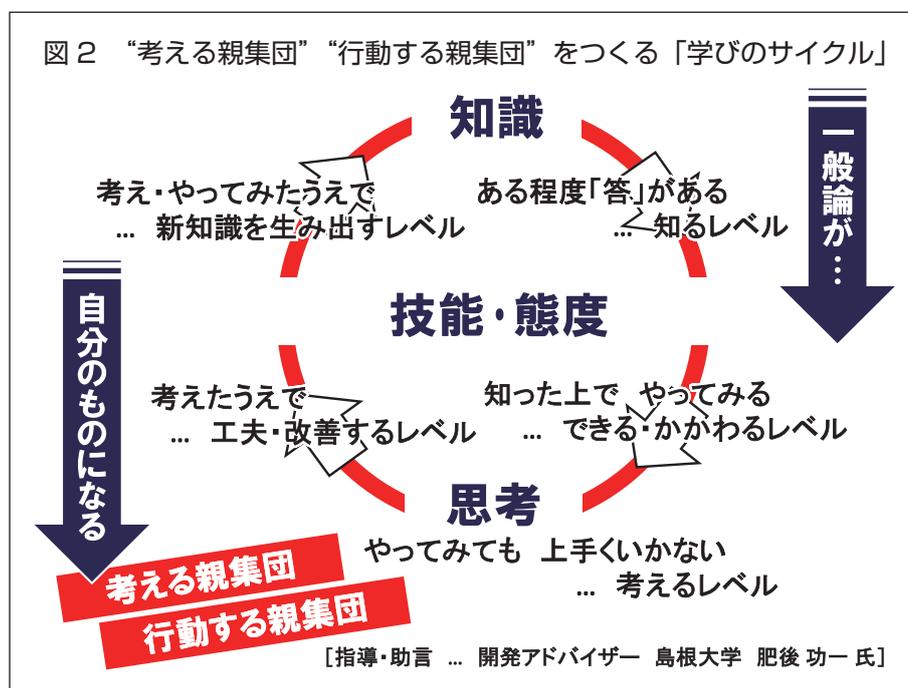
そして、『親学プログラム』でねらう“親とわが子の関係性”における気づきだけでなく、「親の社会的役割」（他の親や地域・学校等とつながりをもって、子どもの育ちを支えること）にも気づくことができるように、『親学プログラム2』では、わが子だけでなく“他の子・他の親・学校・地域等との関係性”も考えることができるようにしています。また、子育てへの自信を高めたり、親であることの幸せについて考えたりするプログラムも充実させました。

このように、『親学プログラム』と『親学プログラム2』は、それぞれの視点から親の役割・機能を支援するとともに、相互の気づきをより深めることで、親自身の人間的な成長を支援する学習プログラムとなっています。親自身の自己実現をめざす2つの学習プログラムの関係を図示すると、図1のようになります。



子育ては、知識や技能だけで対応できるものではありません。子育てにかかわる悩みや不安を解消する手立てとして、この2つの学習プログラムでは、親同士が悩みを語り合い、工夫・改善して取り組もうとする意欲を高める場を提供します。

『親学プログラム』と『親学プログラム2』が、“学んで”“やってみて”“さらに考えて”“やってみる”という、新たな学びを獲得する“学びのサイクル”を創出することで、いじめや児童虐待予防といった喫緊の課題にも対応できる“考える親集団”“行動する親集団”をつくる一助となることを期待しています。(図2参照)



2 『親学プログラム2』の対象

児童虐待を引き起こす要因として、子育て家庭の社会的な孤立や親の育児不安の増大が指摘されています。「厚生労働科学研究報告書」(2004)によれば、生後4ヵ月の子どもをもつ親の34.8%が、「近所にふだん世間話をしたり、赤ちゃんの話をしたりする人」が「いない」状況にあります。

一方、いじめについては、「いじめ追跡調査2010－2012」(2013国立教育政策研究所)によれば、小学校4年生から中学校3年生までの6年間で、「被害経験をまったくもたなかった児童生徒」「加害経験をまったくもたなかった児童生徒」とも「1割程度」であり、多くの児童生徒が入れ替わり被害や加害のどちらも経験している実態があります。

これらのことから、『親学プログラム2』は、「いじめや児童虐待はどこでも起こりうることであり、決して一部の問題ではない」という認識のもと、“すべての子育て層”を対象にした“一般的な予防的支援策”として開発しました。(図3参照)

『親学プログラム2』の活用により、いじめや児童虐待の予防につながる“親の力”“地域の力”を育成したいと考えています。

※「すべての子育て層」には「イエローゾーン」や「レッドゾーン」の親も含まれますが、『親学プログラム2』は、すでに起きてしまった深刻な問題に対応するものではありません。一部の学習プログラムについては、問題を抱えている親の参加が想定される場合、適切なフォロー体制を整えておくなどの入念な準備が必要です。

図3 『親学プログラム2』の対象



3 『親学プログラム2』の構成

『親学プログラム2』は、以下の3つの柱立てにより学習プログラムを構成しています。(図4参照)

① 「様々なつながりをつくる」

いじめや児童虐待の発生を予防するために、子育て家庭の孤立防止のための様々なつながりづくりが求められています。そこで『親学プログラム2』においては、“親同士のつながり” “親と学校等とのつながり” をつくる場を提供することとしました。

“親同士のつながり” をつくることは、現行の『親学プログラム』においても副次的な効果として期待されていましたが、ここでは、さらに発展させて、“親同士がお互いを認め合い・支え合える関係づくり” に資する学習プログラムを開発しています。

また、いじめ問題の発生・深刻化を防ぐために“親と学校等が信頼し合い協力できる関係” をつくるきっかけとなる学習プログラムや“地域の子どものつながり” について考える学習プログラムも、この柱の中に含んでいます。

② 「親の社会的役割について考える」

この柱は、1つ目の柱で効果が期待されている“様々なつながり” についての気づきを基盤として、“地域の子どもの育ちを支えるために、親(大人)として何ができるのか” を考える学習プログラムです。

先にも述べたように、いじめや児童虐待はどこにでも起こりうる社会的な問題であり、“親とわが子の関係性のみでは予防できない” “当事者だけでは解決できない” 問題でもあります。

これらの予防・解決のために、親が“わが子との関係性における親の役割” を越えて、“親の社会的役割(親が他の親や地域・学校等とつながりをもって子どもたちの育ちを支えること)” を果たすことの重要性に気づき、地域ぐるみで子育てに取り組もうとする意識や意欲を高めたことを考えました。

ここでいう“子どもたち”には、もちろん“わが子”も含まれています。この柱の学習プログラムは、主に“わが子以外の子ども”について考える内容になっていますが、“わが子以外の子ども”について考えることは、ふり返って“わが子”のことを考え直す機会になると考えています。

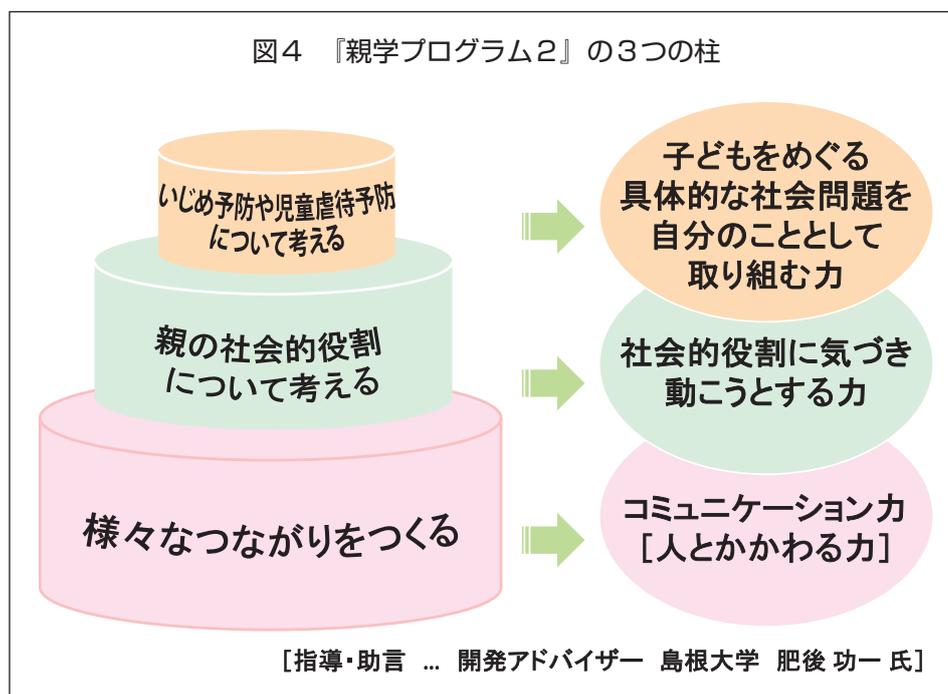
③ 「いじめ予防や児童虐待予防について考える」

この柱は、いじめ予防や児童虐待予防を直接的なテーマとし、「いじめ予防について考えるプログラム」と「児童虐待予防について考えるプログラム」の2つから構成しています。

いじめや児童虐待の予防にあたっては、それらについて誰もが正しく理解しておく必要があります。「いじめは子どもや学校の問題」「児童虐待は特別な家庭の問題」と捉えられがちですが、そのような狭い認識は問題の解決を妨げるばかりか、さらに深刻化させる場合もあります。

ここでは、正しく共通理解した上で、“いじめや児童虐待を防ぐため・深刻化するのを防ぐために何ができるのか”“いじめや児童虐待が起きたときに何ができるのか”を考える学習プログラムを用意しました。

『親学プログラム2』の目的は、いじめや児童虐待の予防につながる親の力・地域の力を育成することですが、身近な場所で問題が起きたときのことをあらかじめ考えておくことは、いじめや児童虐待予防に向けた各自の主体性を高めたり、いじめや児童虐待の深刻化を防ぐ地域のつながりをつくったりする上で重要なことだと考えています。



【参考文献】

- 文部科学省（2012）「つながりが創る豊かな家庭教育～親子が元気になる家庭教育支援を目指して～」
- 服部祥子（2004）「児童虐待発生要因の解明と児童虐待への地域における予防的支援方法の開発に関する研究」（平成14-16年度厚生労働科学研究報告書）
- 国立教育政策研究所（2013）「いじめ追跡調査2010-2012」
- 国立教育政策研究所社会教育実践研究センター（2005）「子どもの成長過程における発達資産についての調査研究」

Ⅱ 『親学プログラム2』の進め方

1 学習プログラムの構成

すべての学習プログラムは「はじめに→アイスブレイク→中心のワーク→ふり返りと分かち合い→おわりに」の流れで構成しており、ファシリテーターと参加者が一体となって学習を進めることができるように組み立てられています。

(1) はじめに

ワークショップの導入として、学習内容について確認します。[ホワイトボード等に明示する]

(2) アイスブレイク

ゲームなどで雰囲気を和らげ、初対面の参加者の緊張を解きほぐすことを「氷を砕く」という意味で「アイスブレイク」と呼んでいます。

■ アイスブレイクは、目的に応じて使い分ける

- 雰囲気を和らげるために
- グループ分けのために
- 自己紹介のために
- 中心のワークの導入のために 等

■ アイスブレイクの留意点

- プログラムの中で取り上げているのはあくまで例であり、参加者の実態やねらいに応じて、P94～102のアイスブレイク資料を参考にアレンジしてください。
- 自然な流れを大切にしましょう。「これからアイスブレイクをします」というような言い方はせず、「みなさん私と一緒に心と体をほぐしましょう」「少し緊張しておられるので、一緒にリラックスしましょう」等の言い方で進めましょう。

(3) 中心のワーク

『親学プログラム2』は、講義など一方的な知識の伝達スタイルだけでなく、グループで意見交換や共同作業を行いながら進める等、多様な学習形態を活用しています。

■ プログラムで取り上げている学習の手法

- ラベルワーク
- カードワーク
- ロールプレイ
- ランキング
- シミュレーション
- コミュニケーションワーク
- エピソード
- 講義
- リフレーミング
- ビデオフォーラム
- 即答フリップ方式全員参加型ディスカッション

(4) ふり返りと分かち合い

中心のワークでの気づきを個人でふり返り、さらにグループや全体で分かち合います。分かち合いでは、他の参加者の想いや多様な価値観にふれ、これまでの「親・大人としての役割」や「子どもたちとのかかわり方」を見つめ直します。

(5) おわりに

学習したポイントを整理する時間です。参加者の気づきを全体に広げるために、ファシリテーターがポイントを提示し、全員で確認します。ファシリテーターは、「進行表」を参考に話をしたり、自分の体験談を話したりして、学習をまとめます。場合によっては、詩や絵本を読むことも効果的です。

- すべての学習プログラムは上記の流れを標準とし構成しています。「学習のねらい」「対象となる子どもの年齢」「参加する親（保護者）の人数や実態」「実施可能な時間」「会場」等に応じて、場にあった流れを検討の上、工夫してご活用ください。
- それぞれの学習プログラムの一部を活用したり、2つのプログラムを合わせて活用したりすることも可能です。
- 「講義・講演」を行った後に、「親学プログラム」を実施することも、とても有効な方法です。

2 ルールとマナーの確認

次の①～③の「ルールとマナー」を参加者に分かりやすく伝えて、必ず確認しましょう。3つのキーワードをホワイトボード等に掲示して、意識化を図ることも効果的です。

- ① 積極的に参加しましょう！
- ② 一人ひとりの考えや想いを尊重しましょう！
- ③ 参加者の個人情報を持って帰らない、もらさない！

(1) 中心のワークに入る前に

- ① 積極的に参加しましょう！
- ② 一人ひとりの考えや想いを尊重しましょう！

キーワード「積極的」

キーワード「尊重」

【例】 では、グループで話し合う前に2つお願いがあります。
 1つ目は「積極的に話し合いに参加しましょう」。みなさん、どんどん意見が出せるようにお互いに協力してください。キーワードは「積極的」です。
 2つ目は、「一人ひとりの考えや想いを尊重しましょう」。みなさんから出た意見を否定したり、反論したりせずに、うなづいたり、相づちを打ったりしてしっかり聴いてください。キーワードは「尊重」です。発言の時間についても、尊重し合ってください。

(2) 講座のおわりに

- ③ 参加者の個人情報を持って帰らない、もらさない！

キーワード「守秘」

【例】 積極的に意見を交換され、新たな気づきがあったのではないのでしょうか。
 最後に1つお願いがあります。今日の活動でお互いの考えや想いをしっかり聴かれたと思いますが、中にはプライベートにかかわる話もあったのではないのでしょうか？
 ここでの私的な話はここだけに置いて帰りましょう。キーワードは「守秘」です。
 ただ、学ばれて「よかったな」と思われたことは、どんどん家庭や職場、地域で、広めていただければと思います。

※ 3つの「ルールとマナー」を中心のワークに入る前にすべて確認して、さらに講座のおわりに③だけ念をおす方法も効果的です。

Ⅲ 『親学プログラム2』を効果的に実施するために

現行の『親学プログラム』は、親同士が交流しながら、ともに活動することをとおして、“親とわが子の関係性”における「親としての役割」や「子どもとのかかわり方」の気づきを促すことを目的に開発・普及してきました。換言すれば、「家庭内における親の成長・自己実現の支援」と言えます。したがって、家庭内での様々な場面の親子関係について見つめ、気づきを促す単発実施を繰り返すことで、目的を達成できると考えていました。

しかし、『親学プログラム2』は、前述してきたように、いじめや児童虐待予防につながる親の力・地域の力を育成することを目的としています。この目的を達成するためには、「家庭内における親の成長・自己実現の支援」に加えて、「地域社会における親の成長・自己実現の支援」が必要だと考えて、『親学プログラム2』を開発しました。

つまり、『親学プログラム』と『親学プログラム2』をセットとして、日頃の子育てをふり返って、上手くいかないことなどの悩みを語り合い、工夫・改善して取り組もうとする意欲を高める場を提供し、新たな学びを獲得するサイクルを創出し、“考える親集団”“行動する親集団”を育てていくという過程をとおして、目的に迫っていけると考えています。この過程こそ、「親役割を通じての自己実現」を支援していくことだと考えています。そのため、系統的に段階をおって、親の成長・自己実現を支援していけるよう、シリーズ講座での実施をおすすめします。

そこで、ここでは、それぞれの現場で、ねらいやシリーズ実施の検討をしていただくため、より効果が期待できるシリーズ実施の例を提案します。

1 親役割を通じての自己実現を支援する5回シリーズ講座

「親役割を通じての自己実現」を支援していくためには、少なくとも5回程度のシリーズ実施が有効だと考えています。ここでは、「考える親集団・行動する親集団づくり」「いじめ予防（いじめ予防に重点をおいた）」「児童虐待予防（児童虐待予防に重点をおいた）」の3つのねらいに応じた5回シリーズ実施のプログラム展開例を提案します。

(1) 考える親集団・行動する親集団づくりのための5回シリーズ例

【提案例1】

- ① 『親学プログラム2』 1-⑤ 「みんなで子育て」
→ 親同士がつながることの大切さに気づく
- ② 『親学プログラム』 1-③ 「子どもに示したい大人のふるまい」
→ わが子との関係性を見つめる
- ③ 『親学プログラム2』 2-④ 「〇〇地区の子どもは、こんな子どもに育てほしい」
→ 親の社会的役割について考える
- ④ 『親学プログラム2』 3-⑤ 「もし、いじめがおこったら…」
→ いじめがおきた時の対応を考える
- ⑤ 『親学プログラム』 7-③ 「わが子のPR ～短所も長所～」
→ わが子を再度見つめ直す

【提案例 2】

- ① 『親学プログラム』 2-② 「子どもに伝えるのって難しい！」
→ 楽しくわが子との関係性を見つめる
- ② 『親学プログラム』 7-② 「こんな子どもに育てほしい」
→ わが子の成長への願いを整理する
- ③ 『親学プログラム 2』 1-③ 「あったか言葉が宝物」
→ 親同士がつながることの大切さに気づく
- ④ 『親学プログラム 2』 2-① 「こんな時、どうする？」
→ 親の社会的役割について考える
- ⑤ 『親学プログラム 2』 4-① 「すてきな子育て」
→ 楽しく子育てする意欲を高める

(2) いじめ予防（いじめ予防に重点をおいた）のための5回シリーズ例

【提案例 3】

- ① 『親学プログラム』 4-① 「親のしつけは子どもへの大切な贈り物」
→ 楽しくわが子との関係性を見つめる
- ② 『親学プログラム 2』 2-② 「“オトナ”の役割を考える」
→ 親の社会的役割について考える
- ③ 『親学プログラム 2』 3-① 「われわれ大人にできること」
→ いじめ問題の解決のためできることを考える
- ④ 『親学プログラム 2』 3-④ 「ネットいじめから子どもを守る」
→ ネットいじめから子どもを守るためにできることを考える
- ⑤ 『親学プログラム 2』 3-⑤ 「もし、いじめがおこったら…」
→ いじめがおきた時の対応について考える

(3) 児童虐待予防（児童虐待予防に重点をおいた）のための5回シリーズ例

【提案例 4】

- ① 『親学プログラム』 4-③ 「しかる基準は？」
→ 楽しくわが子との関係性を見つめる
- ② 『親学プログラム 2』 1-② 「自分再発見！」
→ 自分の性格をふり返るとともに他者へ関心をもつ
- ③ 『親学プログラム 2』 4-③ 「こんな時、わたしなら…」
→ 児童虐待はどこにでもおこる問題としてとらえ、子どもとのかかわり方について考える
- ④ 『親学プログラム 2』 4-④ 「子どもの笑顔と未来のために」
→ 児童虐待予防のためにできることを考える
- ⑤ 『親学プログラム 2』 2-⑤ 「幸せってなんだろう」
→ 親自身の幸せについて見つめる

2 親役割を通じての自己実現を支援する3回シリーズ講座

それぞれの現場において5回程度のシリーズ実施は難しいことも多いと考えられます。そこで、親の成長・自己実現を支援する視点から、効果が見込まれると考える3回シリーズ実施のプログラム展開例を提案します。

(1) わが子との関係性をじっくり見つめる3回シリーズ例

【提案例5】

- ① 『親学プログラム』7-②「こんな子どもに育てほしい」
→ わが子の成長への願いを整理する
- ② 『親学プログラム』6-②「子どもにさせたい体験は？」
→ わが子への具体的ななかかわりを考える
- ③ 『親学プログラム2』4-①「すてきな子育て」
→ 楽しく子育てする意欲を高める

【提案例6】

- ① 『親学プログラム』2-②「子どもに伝えるのって難しい！」
→ 楽しくわが子との関係性を見つめる
- ② 『親学プログラム』3-①「目指せ！早寝・早起き・朝ご飯」
→ わが子の生活リズムを考える
- ③ 『親学プログラム』7-③「わが子のPR ～短所も長所～」
→ わが子を再度見つめ直す

(2) 学校・家庭・地域が連携した子育てにつなげる3回シリーズ例

【提案例7】

- ① 『親学プログラム2』1-④「先生といっしょに」
→ 学校〔教員〕とのつながりを考える
- ② 『親学プログラム2』1-⑤「みんなで子育て」
→ 親同士がつながることの大切さに気づく
- ③ 『親学プログラム2』2-③「〇〇地区の子どもたちに示したい大人のふるまい」
→ 親の社会的役割について考える

(3) 親の社会的役割についてじっくり考える3回シリーズ例

【提案例8】

- ① 『親学プログラム2』1-⑤「みんなで子育て」
→ 親同士がつながることの大切さに気づく
- ② 『親学プログラム2』2-②「“オトナ”の役割を考える」
→ 親の社会的役割について考える
- ③ 『親学プログラム2』2-④「〇〇地区の子どもは、こんな子どもに育てほしい」
→ 親の社会的役割についてさらに考える

(4) いじめ予防につなげる3回シリーズ例

【提案例9】

- ① 『親学プログラム2』 2-② 「“オトナ”の役割を考える」
→ 親の社会的役割について考える
- ② 『親学プログラム2』 3-① 「われわれ大人にできること」
→ いじめ問題の解決のためできることを考える
- ③ 『親学プログラム2』 3-⑤ 「もし、いじめがおこったら…」
→ いじめがおきた時の対応について考える

(5) 児童虐待予防につなげる3回シリーズ例

【提案例10】

- ① 『親学プログラム2』 4-⑤ 「『あたたかい眼差しを』 -虐待から子どもを守る-」
→ 児童虐待について正しく理解し、児童虐待予防のためにできることを考える
- ② 『親学プログラム2』 4-② 「子どもに届けよう、あなたの想い」
→ 自分をふりかえり、子どもとのかかわり方を考える
- ③ 『親学プログラム2』 4-① 「すてきな子育て」
→ 楽しく子育てする意欲を高める

3 「Ⅴ 配慮が必要なプログラム」につなぐシリーズ講座

「Ⅴ 配慮が必要なプログラム」にまとめて掲載しているプログラムを実施するには、その前段として、参加者同士のよりよい人間関係づくりをしておく必要があります。そこで、よりよい人間関係づくりにつながると考えているプログラムを紹介します。

【提案例11】

- 『親学プログラム』 1-③ 「子どもに示したい大人のふるまい」
- 『親学プログラム』 2-② 「子どもに伝えるのって難しい！」
- 『親学プログラム』 4-① 「親のしつけは子どもへの大切な贈り物」
- 『親学プログラム2』 1-① 「みんなでつながろう（親子一緒に）」
- 『親学プログラム2』 1-② 「自分再発見！」
- 『親学プログラム2』 1-③ 「あったか言葉が宝物」
- 『親学プログラム2』 1-⑤ 「みんなで子育て」
- 『親学プログラム2』 2-① 「こんな時、どうする？」
- 『親学プログラム2』 2-③ 「〇〇地区の子どもたちに示したい大人のふるまい」



「Ⅴ 配慮が必要なプログラム」

「Ⅲ 『親学プログラム2』を効果的に実施するために」であげた【提案例】は、あくまでも一例です。シリーズ実施の展開例は、このほかにもたくさん考えられます。ねらいや参加者の実態等に応じて、ご検討の上、実施してください。